

県民と郷土を結ぶ総合博物館

青森県立郷土館だより

News from the Aomori Prefectural Museum

通巻187号 令和7年(2025)3月21日 Vol.55 No.2

令和6年度青森県立郷土館 サテライト展

缶詰王国あおもり — 缶詰の歴史と食文化 —



会期：令和6年7月11日～10月23日 会場：青森県立図書館

「缶詰王国」として、戦前から国内外に名をとどろかせた青森。その輝かしい歴史とユニークな食文化にスポットを当てた本県初の展示「缶詰王国あおもり」を開催しました。目玉は明治31(1898)年頃に製造された「ほや水煮缶詰」のラベル(複製)。目下のところ県内最古の缶詰ラベル(新発見)であるとともに、ほや?!という素材の意外性が話題を呼び「初めて見た」「びっくりした」など多くの方々から反響が寄せられました。

一方、ユニークな「マイ缶詰」の食文化は、王国青森が誇るもう一つの顔。本県には、自ら採った山菜やキノコを加工所に持ち込み、オリジナルの缶詰を作って、大切な人に贈る習慣があります。会場には色とりどりの「マイ缶詰」と缶詰料理(模型)がズラリ。「知らなかった」「ステキです」など、こちらも大きな反響をいただきました。

身近で普遍的な「食」をテーマにしたことで幅広い層の関心を呼び、国内外から多くの方々から御覧いただきました。御来場の皆様、御協力いただいた皆様に心から御礼申し上げます。

さまざまなイベントで「缶詰王国」を全国にPR!



「マイ缶詰」を作って楽しむ!

青森は「マイ缶詰」文化の聖地。大切なあの人や未来の自分にあてた、オリジナル缶詰づくりの体験イベントを各地で開催しました。空き缶に手紙や写真、宝物を入れ、専用の機械で封缶。手書きのラベルを貼れば、世界に一つだけの「マイ缶詰」の完成です。それぞれの思い出や願い、夢や愛が詰まった缶詰を手に、参加者から笑みがこぼれました。



「王国」の歴史と文化を知る!

缶詰づくりが、産業としてだけでなく家庭でも盛んなのは、他県にはない「缶詰王国・青森」ならではの特徴です。背景には、豊かな自然の恵みを最大限に活かす食糧保存の知恵と、贈答を通じて収穫の喜びを分かち合う青森の人々の伝統的な生活文化がありました。その歴史と文化を、各地の講演会や実演会、テレビやラジオで紹介しました。



グッズで「缶詰史」に親しむ!



全国初! 戦前の缶詰をモチーフにした「カプセル型缶詰おみくじ」が登場。付録の豆知識で缶詰の歴史を学べるほか、「大吉」が出ると「缶詰ミニチュアマグネット」か「缶詰ラベルマスキングテープ」が当たるスペシャル企画を開催しました。マグネットは青森工業高校との共同制作。グッズを目当てに何度も御来場下さる方もいて、品切れになるほどの人気でした。



缶詰で「ふるさと」を育てる!

本県の水産教育を担う八戸水産高校を始め、名久井農業高校、青森工業高校、鯨ヶ沢高校、弘前第一養護学校高等部と連携し、展示活動やPR活動、グッズ製作など多面的な取り組みをおこないました。未来を担う子どもたちが、青森の缶詰業の歴史を知り、缶詰づくりの文化に触れることを通じて、ふるさとへの誇りと愛情を育むきっかけになることを願います。

(民俗担当 増田公寧)

あおり街かど探偵団 変わりゆく青森駅前



駅前のりんご市場があった付近を歩きました。



昭和32（1957）年1月当時の青森駅前りんご市場

毎年開催している街歩きイベント「あおり街かど探偵団」、今年度は「変わりゆく青森駅前」と題し、10月6日（日）に参加者12名とともに駅周辺を散策しました。まず、8月に就航満60周年を迎えた青函連絡船・八甲田丸の前を出発し、青森ラブリッジを渡りアウガ前を通り、次いで、ニコニコ通りの南側に進みました。さらに、昭和の建物が残る一角を横切って、青森市民ホール南側に抜け、駅前観光案内所まで歩きました。その間、青函連絡船や、かつてあった旅館街、飲食店、駅前りんご市場などの歴史について解説しました。

参加者の方々は、観光物産館アスパム（安方）付近の昭和の街の名残を懐かしんだりしながら、改めて駅前周辺の変化に驚いていました。

青森駅前の風景は時代により変わっていきましたが、ここ数年の変化は劇的です。かつての青函連絡船第一岸壁は、今のワ・ラッセ西の広場の一部ですが、3年ほど前に駅前ビーチに変わりました。駅近くの古川の旅館や製菓工場には、営業を終えたところもあります。旅情あふれた4代目青森駅舎跡地には、昨年春、大きな駅ビルが完成しました。5年後、そして10年後には、駅周辺の街並みはどのように変わっていくのでしょうか？

（歴史担当 佐藤良宣）

自然観察会 浅虫の自然に触れる

9月29日（日）に青森市浅虫を舞台に自然観察会を行いました。当日は天気に恵まれ、絶好の観察日和でした。午前の浅虫温泉森林公園の植物観察では、参加者は植物の特徴や違いを確認しながら、興味深げに観察を行っていました。展望所からは湯ノ島、鷗島（ごめじま）などを眺め、島々の成り立ちについて学びました。どちらもマグマが冷え固まった安山岩でできています。また、湯ノ島では、平安時代に海水から塩作りがされていたようで、実際に製塩土器の破片が発掘されています。

午後は、東北大学大学院生命科学研究科附属浅虫海洋生物学教育研究センターの協力を得て海洋プランクトンの顕微鏡観察を行いました。海洋プランクトンは姿や動きが独特で参加者も興味津々で、夢中になって顕微鏡を覗いていました。

今回の観察会では、植物、地質、海洋生物という自然分野だけでなく、考古担当の学芸員による周辺の遺跡等の解説も行い、浅虫の自然を様々な視点から観察することができました。

（自然担当 原 裕太郎）



浅虫海洋生物学教育研究センターの先生方の協力を得て海洋プランクトンを顕微鏡で観察しました。

土曜セミナー報告

大平山元遺跡の魅力

青森県の自然や歴史を紹介する土曜セミナー。今年度は、青森県総合社会教育センター研修室を会場に全11回を実施しました。2月8日(土)に行った第10回は、外ヶ浜町の大平山元遺跡について紹介しました。聴講者は18名、同町からも1名の方が参加されました。

当館が調査し、現在は遺跡整備が進む外ヶ浜町の国史跡大平山元遺跡(大平山元Ⅰ遺跡と大平山元Ⅱ遺跡)、そして隣接する大平山元Ⅲ遺跡の魅力「三つのちから」と表現して紹介しました。

- ①調査にかかわった人が、バトンを次の人に手渡し、遺跡整備までつながる物語に深みがある。
- ②旧石器時代から縄文時代へと移行する時代の転換点の遺跡であり、旧石器時代最終末と考えられていた石器群に土器が伴うことを明らかにした。
- ③大平山元遺跡の調査により青森県内での旧石器時代から縄文時代草創期の研究が進展した。同遺跡の調査以前は、偶然に石器が採取できたケースが多く、数量も少なく断片的。同遺跡は、調査前年の試掘調査を経た計画的な調査であり、まとまりのある石器群が出土した。石器製作技術が検討され、関東・中部地方との石器群の対比から、おおよその時期・位置づけもわかるようになった。

遺跡調査の発端は、昭和46(1971)年に中学生が畑で大形の石斧を発見したことでした。その石斧を中学校の先生が当館開設準備室に持参します。大平山元Ⅰ遺跡と名前が付けられ、昭和50(1975)年11月、開館2年目の当館の試掘調査で、旧石器時代終末期と考えられていた石器群とともに、土器が見つかります。翌年の調査では石鏃が見つかったほか、石器が採取できる場所があるという情報が寄せられ、その試掘調査で旧石器時代の石槍が出土し、大平山元Ⅱ遺跡と名付けられました。昭和52(1977)年から本調査を行い、翌年には大平山元Ⅲ遺跡が確認され54年の調査につながります。

目の前の扉が開いて想定以上の成果が得られ、次の扉がまた開くという状況が連続します。そして、平成10(1998)年の大平山元Ⅰ遺跡の調査で出土した土器も、年代測定で約1万5千年前の北東アジア最古の土器と分かりました。

その後も町による調査が継続され国史跡となり、令和3(2021)年には世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つとして登録されました。遺跡公園には、寒冷した気候に生育していたアカエゾマツやコケモモが植えられました。寒さの中で温かな食べ物を煮込むことのできる土器の出現の意義は、大きかったと考えられます。

(考古担当 齋藤 岳)



遺跡調査の契機となった大平山元Ⅰ遺跡の石斧
長さ約19cm、横幅約8cm



1975年の試掘調査で最初
に見つかった土器
長さ2.1cm、横幅1.7cm



大平山元Ⅱ遺跡の石槍
長さ6.0cm、横幅2.2cm



植栽された
アカエゾマツ



コケモモ
中央の実は赤く色
づき、食用となる。
寒さに強い。

